

茨城大学社会連携センター支援事業

平成28年度
学生地域参画プロジェクト報告書

Ibaraki University

平成28年度 学生地域参画プロジェクト報告書

平成28年度学生地域参画プロジェクト報告書の刊行にあたって 茨城大学社会連携センター副センター長・地域共生部門長 西野由希子 …	1
平成28年度 実施プロジェクト	
○日本一つながる学食プロジェクト …… (代表者：理学部・2年 藤田 真帆)	2
○多-lingual ～地域がつながり、世界へつながる～… (代表者：人文学部・1年 佐々木 春菜)	5
○現場から学ぶ茨城学 ～畑で広げる地域の「わ」～… (代表者：人文学部・1年 木村 愛実)	9
○大洗応援隊！ ～広げよう交流の輪 踏み出そう新たな一歩～… (代表者：理学部・3年 小沼 里沙)	15
○茨大聞き書き隊 Notes …… (代表者：人文学部・4年 菊地 ほのか)	19
○まなびの輪 ～大洗との協働～… (代表者：人文学部・3年 野中 萌)	23
○あみゆめカフェ ～知って、好きになって、発信する 未来に繋げるカフェづくり～… (代表者：農学部・2年 小貫 えみり、中原 沙彩)	27
○種まきサミット… (代表者：人文学部・3年 大枝 俊貴)	32
○君とチャレンジ ～障害のある人の社会参加支援プロジェクト～… (代表者：人文学部・3年 首藤 沙姫)	36
○のらボーイ&のらガール 食農教育プロジェクト… (代表者：農学部・3年 佐々木 亮輔)	44
平成28年度優秀プロジェクトの選出…	46
(参考)	
平成28年度「学生地域参画プロジェクト」募集要項…	47

「平成28年度 学生地域参画プロジェクト」報告書の刊行にあたって

「平成28年度 学生地域参画プロジェクト」の報告書をお届けいたします。

「茨城大学 学生地域参画プロジェクト」は、地域での活動に主体的に取り組もうとする学生たちのグループに対して、大学が支援を行うもので、本年度は10件のプロジェクトが採択されました。

それぞれのグループは、仲間を募り、自分たちが地域で行いたい活動について内容を検討し、年間の活動計画を立て、予算を組みました。プランに沿って実行し、最終の報告会では、一年の活動を振り返ってまとめの報告をしました。新たに立ち上げたグループもあれば、先輩たちから後輩へと引き継がれたプロジェクトもありましたが、どのグループも、一年間、活動を進めるには苦労もあったこと、しかしそれ以上に学ぶこと、成長する部分が大きく、楽しさを感じ喜びを得たことも、この報告書から読み取れると思います。自主的に取り組み、成果をあげている学生のみなさんにエールと賛辞を送ります。

茨城大学ではこの「学生地域参画プロジェクト」という形で、地域でさまざまな活動を行う学生たちへの支援を10年以上継続してきました。平成27年度から、全学の1年生全員が必修科目として学ぶ「茨城学」の授業が始まったこともあり、学生たちが地域で学び、活動する機会は、より増えています。

平成28年12月21日には、本プロジェクトのほか、授業の一環として地域で学んでいる学生たち、サークルや部活動、ボランティア活動、自主的なグループなどで地域の方とともに活動したり、地域での活動に取り組んだりしている学生たちが一堂に集まり、報告や意見交換・情報共有を行う「茨城大学学生地域活動発表会2016 <はばたく！茨大生>」をはじめ開催しました。この会には、30の学生グループが参加し、茨城大学では本当に多くの学生たちが地域での活動を行っていること、活動内容もさまざまな分野に広がっていることを自治体・企業・一般など、学外からおいでいただいたみなさまや、学生・教職員に知って頂く機会になりました。

茨城大学では、今後も、本「学生地域参画プロジェクト」を継続、充実させ、さらに多くの学生たちが地域で学び、地域のみなさまといっしょに活動していく機会をつくって参ります。みなさまには、引き続き、学生たちへのご指導やご助言、応援をいただけますよう、お願いいたします。

茨城大学社会連携センター副センター長・地域共生部門長
西野 由希子（人文学部教授）

日本一つながる学食プロジェクト

教育・研究

代表者：理学部理学科 2年 藤田 真帆

連携先

- ・株式会社坂東太郎
- ・ほしいもや

佐久間 瑠（人文学部社会科学科 1年）
伊藤 真帆（教育学部情報文化課程 1年）
大村みるほ（教育学部情報文化課程 1年）

顧問教員

清水 恵美子（社会連携センター・准教授）

プロジェクトの概要

当プロジェクトは、2015年10月に、茨苑会館内にある学生食堂をリニューアルすることを目的とし発足した。食堂リニューアルをするにあたり、株式会社坂東太郎と連携し、週2回の会議を通じ意見を交換しながら目標の具現化を一步ずつ着実にやってきた。

参加者

藤田 真帆（理学部理学科 2年）
川原涼太郎（工学部機械工学科 2年）
庄司 紗月（工学部機械工学科 2年）
肥後 亮志（人文学部社会科学科 2年）
外間 花怜（人文学部人文コミュニケーション学科 3年）
根本 貴彬（人文科学研究科社会科学専攻 M2）
新井ひな乃（人文学部人文コミュニケーション学科 1年）
石津 彰理（人文学部社会科学科 1年）
梅津 尊子（教育学部養護教諭養成課程 1年）
小川 理穂（教育学部学校教育教員養成課程 1年）
鐘下 航平（人文学部人文コミュニケーション学科 1年）
菊地 唯（人文学部人文コミュニケーション学科 1年）
千葉 綾馬（人文学部社会科学科 1年）
野原緋奈子（教育学部情報文化課程 1年）
渡邊 真由（教育学部学校教育教員養成課程 1年）

当プロジェクトは、食を通じて地域や人とのつながりを学び、成長できる、「食と学びの日本一」をメインテーマとし、それに付随して「感じる、飛び出す、好きになる」をサブテーマとしている。これは茨苑食堂で提供される食材や物、企画を通じて、それに興味をもった人が実際に生産の場に行ったり地域の方と関わっていくことで、茨城という土地を理解し愛着を持ってもらおうというものである。今年度、茨苑食堂のリニューアルオープンという大きな目標を達成し、その後も新メニュー開発や企業連携を通じ学生や地域と密に関わっている。私たちは、学生と地域・企業がお互いに且つ自主的に関わり合うようになれば茨城大学の地域との連携力が学生自身の手によって向上し、学生自身の社会力も向上すると考える。当プロジェクトは、食堂を利用する人が受け身ではなく自主的に地域に参画できるよう、茨苑食堂が学生と地域の双方に開かれた窓口になることを目標としている。

プロジェクトの成果報告

●茨苑食堂リニューアル

「感じる、飛び出す、好きになる」というコンセプトに加え、茨苑食堂に訪れた人同士の輪を繋ぐ「憩いの一角」にすることを目標に内外装案提案という形でリニューアルに携わった。以前までの無機質な空間を改善すべく、昨年3月に行った他大学視察を参考にし、テーブルや椅子、照明等の具体案を学生目線で提案した。それらのレイアウトもさることながら、混雑時の並び方を想定し、その場合の動線も視野に入れつつ、様々なパターンを考えた。夏休みに改修工事を進め、2016年9月30日にオープンセレモニーを開いていただき、株式会社坂東太郎の青谷社長を始め、たくさんの方から祝福や激励の言葉を頂いた。読売新聞社など、複数のメディアからの取材も受けた。一般公開及びリニューアル開店は後期日程開始日の同年10月3日で、多くの学生、教員に利用していただいた。現在は、以前のような“食べたら出ていく”姿は減少し、混雑時以外はご飯を食べ終えた後も友人同士で談笑する姿が多く見受けられる。プロジェクトメンバー周辺からも、「利用しやすい」「過ごしやすくなった」などの声を度々聞くようになった。今後は、お客様の声を定期的に聞き、その需要に合った空間にしていきたい。もちろんその中に私たちの目標としている“学生が地域に参画していけるような空間にすること”も忘れない。現在は、セレモニー時に青谷会長からいただいた祝い金でバルコニー部分に屋根をつける計画をしている。

●新メニュー開発

昨年7月から新メニュー開発にも力を入れている。茨苑食堂で既に販売されている商品を基に、株式会社坂東太郎とコラボレーションする形をとった。昨年7月に完成した商品は、おかずクレープが3種（ツナマヨ、とん

かつ、てりやきチキン）、カレーが2種（夏野菜、旨辛夏野菜）。この時、約2週間茨苑食堂利用者にアンケートを実施しそのデータを基に作るメニューを決定した。おかずクレープが食べたい、という声が多かったことから当プロジェクトが初めて開発するメニューが決まった。新メニュー開発当初から、この地域の食材をメニューに使いたいという希望があり、今年2月にバレンタイン企画として茨城県産の苺を使ったクレープを販売した。テスト期間中にも関わらず、毎日売り切れになるほどの人気を博した。新メニューの告知はSNSや手書きPOP、チラシなど様々な方法を取った。これらは新メニューだけではなく、プロジェクトや食堂自体の周知にもつながった。また、去年は読売中高生新聞の学食コーナーへの取材も受けた。このようにメディアに取り上げていただけるのは、地域の方にも足を運んでいただくきっかけとなる。来年度は、学外からも足を運んでいただけるようなメニュー、さらに地域の食材を使ったメニューの考案も進めていきたい。

●地域連携企画

当プロジェクトの目標である、学生と地域が繋がるといふ部分に対し、「つながる企画」として地域連携企画を進めている。今年度はひたちなか市の干し芋農家の安様と連携し、干し芋を作る工程の手伝いを体験させていただいた。干し芋のもととなるサツマイモの収穫から始まり、大きさの選別、ふかした芋の皮むき、スライスした芋を干す作業を体験した。来年度以降、地域の方をお呼びして企画をする予定の為、今年度はプロジェクトメンバーのみでプレ企画として行った。この干し芋を使った商品開発も企画しており、既にクレープやお菓子の試作会を行っている。使用する芋の種類によって加工方法が異なってくるので、株式会社坂東太郎のスタッフの

方と話し合いながら思案している。来年度以降は、干し芋を始め、笠間焼体験などの地域連携型企画、大学内のサークルとコラボレーションする学内企画など企画運営にも力を入れていきたいと考えている。それにあたって、学外との連絡をどのようにして取っていくのかなど、懸念される事項について1つ1つ丁寧に解決策を考えていく。また、他プロジェクトとのコラボレーションの話も出ており、現在話し合い中である。

●各メディア

読売中高生新聞、茨城放送に当プロジェクトの活動を取り上げていただいた。

来年度以降は、さらに活動の場を広げ、プロジェクトの目標達成のため邁進していく。

多-lingual ～地域がつながり、世界へつながる～

課外活動

地域活動

国際交流

代表者：人文学部人文コミュニケーション学科 1年 佐々木 春菜

連携先

グローバルフェスタいばらき実行委員事務局

顧問教員

清水 恵美子（社会連携センター・准教授）

参加者

- ・ 佐々木春菜（人文学部人文コミュニケーション学科 1年）
- ・ 高矢 綾子（人文学部人文コミュニケーション学科 1年）
- ・ 丹治綾弥乃（人文学部人文コミュニケーション学科 1年）
- ・ 岩澤 英樹（人文学部社会学科 1年）
- ・ 孫 浩（人文学部社会学科 2年）
- ・ 劉 俊智（人文学部社会学科 2年）
- ・ 小松崎流緋（人文学部社会学科 1年）
- ・ 菊池 純（人文学部社会学科 1年）
- ・ 小栗 和花（人文学部人文コミュニケーション学科 1年）
- ・ 平井 敦（工学部情報工学科 1年）

プロジェクトの概要

●プロジェクトの発足について

平成27年度より開講された「茨城学」の初回授業は、学生地域参画プロジェクトを行った先輩が講師となって、本プロジェクトについて講義するという内容であった。それを受講し、関心を持った1年生が主体となり、平成28年4月に本プロジェクトは結成された。

●プロジェクト名について

多国籍・多言語の『多』と、bilingualやtrilingualのlingualを組み合わせた造語になっている。

●プロジェクトの目的と内容

主な活動は学生や外国人、地域の方など、国籍の垣根を越えていろいろな人が気軽に集まり、交流を楽しめる「多国籍カフェ」の開催である。

多-lingualの活動の大きなテーマは「出会い」である。活動の中で、参加してくれた人に、人や国との新しい出会い、またそこから生まれる新しい人とのつながり、興味、価値観の共有を提供することが目的である。出会いは私たちが何かを始めるきっかけにもなり、自分の生き方を変えるものでもある。また、出会いから生まれた人と人とのヨコのつながりは地域愛をも育むとも考えたからである。

「多国籍カフェ」は水戸の街にあるVILLAGE310というカフェをお借りして開催した。このVILLAGE310さんは、「飲食」と「読書」を中心に、まちなかと地域コミュニティを結ぶカフェとなっている。

●プロジェクトの活動報告

①「第1回多国籍カフェ」

2016年7月23日(土) 15:30~18:00

@VILLAGE310

参加者: 18名

(プロジェクトメンバーを除く)



第1回多国籍カフェの風景

参加者やプロジェクトメンバーが自由に飲食をしながら、交流を楽しんだ。留学生や水戸に住んでいるALTの先生、留学から帰ってきた茨大の先輩なども参加していただいた。



「第1回多国籍カフェ」の集合写真

②「第2回多国籍カフェ

～Halloween Party～」

2016年10月31日(月) 18:00~20:00

参加人数: 32名

(プロジェクトメンバーを除く)



「第2回多国籍カフェ
～Halloween Party～」の風景



ゲーム企画の風景

参加者もメンバーも、それぞれ自由に仮装をしてハロウィンを楽しんだ。また、参加者同士が交流を図りやすいように、ゲームなどの企画も取り入れた。



「第2回多国籍カフェ
～Halloween Party～」の集合写真

● 広告・メディア・取材掲載



多-lingual作成のチラシ



VILLAGE310さん作成のチラシ

これらのチラシは、大学構内、水戸の街、水戸駅周辺で配布した。特に外国人の方に知ってもらうために、外国語で話しかけて説明する活動も行った。



10月29日(土) 12:00~12:15
茨城放送ラジオ
「青春インタビューーピングなう！」出演



茨城新聞2017年1月9日付 1面

プロジェクトの成果報告

● プロジェクトの成果

- 多国籍カフェでは、飲食をしながら初対面の参加者やプロジェクトメンバーが自由に交流を楽しめた。
- いろいろな国の人が集まったり、違う学部、学年の人が集まったりすることで、普段の生活では出会えないような人たちと会話することができて、参加者自身の視野が広がることにつながった。
- 外国人と気軽に会話ができ、英語や多言語を抵抗なく話せるようになる機会となった。
- テーマだった国籍を問わない人と人との新たな出会い、異文化との出会い、世界との出会いなど、多くの出会いが生まれることができた。

● 外部からの評価

◆ 「多国籍カフェに参加したことで、今まで知らなかった人たちと出会えたり、外国の方と英語で交流できたり、箱の中身は何でしょうゲームなど、よく練られた企画があったりして、とてもよかった。SNSで情報発信してくれたのが分かりやすかった。参加費が安かったから、参加しやすかった。雰囲気がとてもよかったので交流しやすかった。」

(茨城大学 理学部 1年)

◆「シンプルで、とてもいいイベントだと思いました。私はこういうイベントを待っていました。次の機会にも絶対参加したいです。」

(茨城大学 人文学部2年)

◆「今日、僕は皆さんとすごく楽しい時間を過ごしてきました。佐々木さんに会えて嬉しかったです。今日の行事に招待してくれて、本当にありがとうございました。」

(水戸に住んでいるALTの先生)

◆「英語での、プロジェクトや多国籍カフェについての説明がとても分かりやすくてよかった。」

(水戸に住んでいるALTの先生)

●今後の展望

本プロジェクトは1年生が主体となり、企画運営を行ってきた。大学生活にまだ慣れていないころから活動を開始したため、大変なことも多かったが、大学の授業や生活では経験できないことを多く経験することができた。大学生ならではのアイデアを形にできたり、大学生だからこそ地域のためにできることが見つかったり、自分たちの可能性に気付くことができた。

また、活動を通して「出会い」の大切さを強く実感した。普段の生活から一歩出て何かに挑戦するほど、新しい出会いがあり、影響をうけて私たちの人生は変わっていく。私事ではあるが、プロジェクトを通して出会った人たちのおかげで、2月からのカナダへの留学を決意することができた。これからも、大学の外の地域や世界に積極的に出て、新しい出会いを大切にしていきたい。

本プロジェクトは1年で終了する予定ではあるが、活動を通してできたつながりを何かの活動につなげていきたい。

またメンバーが学んだことや感じたこと、活動について新1年生にも伝える機会をつくり、彼らがよりいい経験をできるように、地

域に出て活動するきっかけを与えられるように手助けすることも積極的に行っていきたい。

現場から学ぶ茨城学 ～畑で広げる地域の「わ」～

地域交流

代表者：人文学部社会科学科 1年 木村 愛実

連携先

- ・NPO法人雇用人材協会／あしたの学校
- ・水戸農業協同組合
- ・株式会社青春畑きくち農園

顧問教員

清水 恵美子（社会連携センター・准教授）

参加者

- ・木村 愛実（人文学部社会科学科 1年）
- ・小松崎流緋（人文学部社会科学科 1年）
- ・加藤 駿（人文学部社会科学科 1年）
- ・澤田 桃子（人文学部社会科学科 1年）
- ・江口 紗姫（人文学部人文コミュニケーション学科 1年）
- ・福田 剛大（人文学部人文コミュニケーション学科 1年）
- ・渋谷 直樹（教育学部学校教育教員養成課程 2年）

プロジェクトの概要

●プロジェクトの背景

本プロジェクトは、茨城学で学んだ「農業県・茨城」が周知されていないという現状を打破するため、「食」を切り口に地域と関わる活動を始めた「食プロ」（昨年度最優秀プロジェクト『現場から学ぶ茨城学～「食」で開こう地域のトピラ～』の略称）の、後継・発展的プロジェクトとして、茨城学で食プロの成果発表を聞き感銘を受けた1年生が集まって発足した。我々は実際に農業を行うこ

とで、より現場に近いところから地域と繋がっていき、「農業県・茨城」を知りたいと考えた。

●プロジェクトの目的と内容

農プロ（本プロジェクトの略称）「農業を通して地域とつながる・地域をつなげる」をコンセプトに、「生命を育てる感動・達成感を知りたい」という思いのもと、ひとつの畑からコミュニティを創り、「ふるさと」を考えるきっかけを作ることを目的とした。

本プロジェクトは三年間の活動を計画しており、今年度は茨城県で問題となっている耕作放棄地の再生を試みた。ここに学生や地域の人々が集うことで、地域の良さに気づき、共に「ふるさと」を考えることを狙った。

「マイナスから創り上げる」ということを重視し、耕作放棄地での作業をイベント化、学生や社会人を呼び、畑を作るところからスタートし、耕作放棄地を再生した畑を運営した。次年度以降は、現在の畑を維持しつつ、茨城大学内に畑を作ること、さらに、そこで作られたコミュニティで地域活性化の為のイベントを行うことを計画している。

●連携の方法・内容

- ・NPO法人雇用人材協会／あしたの学校 佐川雄太様
- ↳ イベントを開催するにあたって、運営面でのサポートをいただいた。また、北関東三県団交流会をご紹介いただき、他団体との

交流の場、活動報告の場をご提供いただいた。

- ・水戸農業協同組合 菌部さとみ様
 - ↳耕作放棄地を探し、地主様を探し、地主様と交渉・契約をするまで手厚いサポートをいただいた。
 - ・株式会社青春畑きくち農園 菊地章夫様
 - ↳農業や畑の運営に関して知識の乏しい我々のために様々なサポートをいただいた。
- また、イベントにも多く出席していただいた。

●活動日程

本プロジェクトが今年度行った活動は、大きく分けて2本の柱に分かれる。

■耕作放棄地での活動

連携先であるJA水戸様に、耕作放棄地探し、地主様との交渉、契約までご協力いただき、2年間の契約で水戸市飯富町に耕作放棄地をお借りした。

計4回のイベントを実施し、茨城大学生を中心に他大学生や社会人の方にもお越しいただいた。茨城大学生も学年や学部は様々で、「普段話さない人とも話すことができた」、「友人が増えた」という声もあった。また、第一回のイベント後やイバラキカクの時間に農プロの将来について話し合い、メンバーでない学生からの意見も活動の中に取り入れようとした。耕作放棄地再生ということで作物の成長が危ぶまれたが、普段の畑の維持・管理は、メンバーが朝や放課後を使って行い、無農薬で野菜を育て上げた。

◎定例活動

毎週火曜日 8:30~10:00

畑にて朝活

毎週木曜日 昼休み

学生のみで会議

※メンバー各自、担当野菜を見守るため、朝

や放課後に活動することもある。

◎イベント

① 第一弾「雑草討伐」

2016年8月11日(木) 動員14名

2メートルを超える雑草をほぼ人力だけで刈り払い、除根・除石を行い、畑の土台を作った。また、作業後は参加者全員で、「この畑で何をしたいか」「どんなものを植えたいか」といったことを話し合い、実際に種や苗の売り場を見に行った。



雑草討伐後 集合写真

② 第二弾「種まきまき」

2016年9月11日(日) 動員11名

第一弾で土台を作ったところに堆肥を混ぜ込み、畝を作って畑の形にした第一弾の作業後に参加者で選んだ野菜5種類（ほうれん草、そら豆、白菜、ベビーキャロット、玉ねぎ）を植えた。



種まきまき後 集合写真

③ 第三弾「ほうれん草の卒業式」
「ほうれん草の嫁入り」

2016年11月6日(日) 動員7名

畑で育ったほうれん草とベビーキャロットの収穫を行った。また、種から育てていた玉ねぎが苗まで育ったため、広い場所に植替えを行った。作業後、飯富市民センターに移動し、収穫した野菜を使って「ほうれん草と鮭のクリーム煮」を作った。2班に分かれて調理し、食べ比べをした。



ほうれん草の嫁入り 調理風景

④ 第四弾「11月のハーベスト」

2016年11月6日(日) 予定

雨天により未実施。ほうれん草とベビーキャロットの収穫、および調理イベントの2回目を行う予定だった。

⑤ 第五弾「12月のハーヴェスト・収穫」

「12月のハーヴェスト・調理」

2016年12月3日(土) 動員23名

畑にて、大きく育った白菜、ほうれん草、ベビーキャロットの収穫を行った。ほうれん草とベビーキャロットは、お土産として持ち帰っていただいた。作業後、飯富市民センターに移動し、収穫した白菜を使って鍋を作った。4つの班に分かれ、4つの味(塩、味噌、キムチ、)を作り、食べ比べをしながら交流を行った。



12月のハーヴェスト・収穫後 集合写真



12月のハーヴェスト・調理後 集合写真

■ 対外連携

◎ 常磐大学との連携

常磐大学の松原哲哉准教授と6月初めからお話をさせていただき、担当なさるプロジェクト科目の成果発表の場である「2016年常磐大学ファーム秋蕎麦収穫祭」にお招きいただいた。ここでは、常磐大学生だけでなく、常磐大学との交換留学生の方々、地域の方々、当日会った茨城大学の他団体とも交流ができた。松原准教授からもお話を伺い、今後も連携して活動しようということで、現在常磐大学の学生と連絡を取り合っている。



お蕎麦収穫祭 会食風景

◎ 北関東三県団交流会への参加

連携先であるNPO法人雇用人材協会の佐川様より、「北関東三県団交流会」にお招きいただいた。これは、北関東三県で地域活動を行う団体が集まって、活動報告やディスカッションを行う場である。ここに、唯一の大学生団体として参加させていただき、他団体から活動に対し様々なアドバイスを受け、大学生の目線からの地域活動についてディスカッションをした。



北関東三県団交流会 活動発表

◎ 大学内

大学内では「日本一つながる学食プロジェクト」と合同会議を行った他、当大学の宮口右二教授よりご紹介いただいた、茨城大学農学部と県立医療大学とのインターカレッジサークル「楽農人」とも連携を図った。8月から連絡を取らせていただき、近く合同勉強会を行うという方針で話が進んでいる。「うら谷津再生プロジェクト」についてもお話を伺い、そちらの活動にも参加させていただこうと考えている。

■ 取材掲載



学内情報誌 Blooming



茨城新聞 2017年1月9日付 1面
『「地域元気に」学生奮闘』(農プロの紹介)

この他、朝日新聞社の取材も受けさせていただいた。

プロジェクトの成果報告

●プロジェクトの成果

半年の活動で様々な方と出会い、さらに新しい繋がりが生まれただけでなく、イベント参加者同士を繋げることもできた。

耕作放棄地を再生するという点で、「農業県・茨城」の抱える問題に対し、より近いところから考え、行動することができた。また、茨城学での告知や活動報告、地域活動発表会への参加などで、より多くの学生に耕作放棄地問題を身近な問題として知ってもらえたのではないかと思います。

地域のコミュニティをつくるという点では、茨城大学生だけでなく、他大生や社会人の方々に参加していただくことで、学校の中だけではない繋がりを生み出した。SNSツールを用いて参加者同士が対話できる環境を整え、

「一度イベントで会っただけ」で終わらせない関係を作っている。実際に、農プロのイベントに参加したことがきっかけで友人となり、一緒に地域活動やボランティア活動をするようになったという学生もいる。

農プロを知ったこと、また、農プロのイベントへの参加が、「農業県・茨城」の実態や農業について、より現場に近いところから知るきっかけとなったのではないかと考える。また、人と人との繋がりを感じる、生み出すきっかけにも少なからずなったのではないだろうか。

●今後の課題・展望

今年度は畑の運営に手いっぱいになってしまい、イベントの広報が遅れてしまった。地域のコミュニティをつくることを最終的な目的としながら、イベント参加者のおよそ58%が茨城大学生であった。もっと幅広い年代層に参加してもらいたいと考え、近隣の小学校（飯富小学校、渡里小学校）に出向き、活動紹介のチラシを配布していただいたが、イベント参加に繋げることはできなかった。また、地域の方々や連携先の方々への働きかけ、交流が少なかったのも改善の余地がある。今後は、より地域を巻き込んだ活動ができるよう、イベントの広報を早く広くできるよう、工夫する。また、今回、活動に対するご理解をいただいた小学校や、北関東三県団交流会で繋がりが生まれた団体、畑近くの住民の方々との連携を強化し、小学校や団体のイベントや運営にボランティアとして参加し、農プロのイベントにも参加してもらおうというような関係性を築きたいと考えている。また、今年度つながった大学内の団体や常磐大学との連携も強化し、一緒にイベントを企画していきたいと考えている。

畑の運営に関しては、今年度同様メンバーが管理していくが、いずれは近隣住民の方々

にもご協力いただけるようになれば理想的だと考える。

また、茨城大学生がより地域について考え、地域に飛び出すきっかけになるよう、今年度断念した「茨苑会館の裏に畑をつくる」という活動も形にしていきたいと考える。これにより、地域の人も大学内に足を踏み入れやすくなり、より開かれた、地域に根差した大学になれるのではないかと考える。

我々の活動が、地域に興味を持ち、茨城県に興味を持つ学生が増えるきっかけになれるよう、来年度以降は地域連携に力を入れていこうと考えている。

【お世話になった方々】

- ・NPO法人雇用人材協会／あしたの学校
佐川雄太様
- ・水戸農業協同組合 菌部さとみ様
- ・株式会社青春畑きくち農園 菊地章夫様
- ・小田木保様（地主様）
- ・常磐大学 松原哲哉准教授
- ・常磐大学 プロジェクト科目履修生の皆さん
- ・茨城大学農学部 宮口右二教授
- ・楽農人の皆さん
- ・飯富市民センター
- ・ファミリーマート飯富町南店
- ・飯富小学校
- ・渡里小学校
- ・秋本様
- ・藤田様
- ・イバラキカク
- ・イベントに参加して下さった皆さん

大洗応援隊！ ～広げよう交流の輪 踏み出そう新たな一歩～

ボランティア

代表者：理学部理学科 3年 小沼 里沙

連携先

大洗町議会、髭釜商店街、大洗町役場まちづくり推進課、大洗町商工会、京都大学防災研究所

顧問教員

伊藤 哲司（人文学部・教授）

参加者

小野寺 藍（教育学研究科障害児教育専攻 M2）
柴田 裕輝（理工学研究科理学専攻 M2）
沢村 浩平（理学部理学科 4年）
加藤 成美（人文学部人文コミュニケーション学科 4年）
武田 佑穂（人文学部人文コミュニケーション学科 4年）
細萱 真希（人文学部人文コミュニケーション学科 4年）
宮崎 泉（人文学部社会科学科 4年）
小沼 里沙（理学部理学科 3年）
星野 春奈（理学部理学科 3年）
松田 健佑（人文学部社会科学科 3年）
鈴木 菜々（農学部地域環境科学科 2年）
小野寺 哲（工学部電気電子工学科 1年）
細川 顕大（工学部知能システム工学科 1年）
青山 実樹（理学部理学科 1年）

プロジェクトの概要

＜プロジェクトの背景＞

「大洗応援隊！」とは、東日本大震災を受け、大洗町の復興支援を行うことを目的として2011年5月に創設された社会的ネットワーク組織である。大洗町での活動に関心を抱いて集まった学生や社会人によって構成されており、Face bookのグループ機能を利用して情報の共有を行っている。現在は茨城大学の学生が中心となって活動している。2012年9月より、地域住民や観光客の交流の場になることを目指して、大洗町の髭釜商店街の空き店舗を活用した「ほげほげカフェ」を隔週土曜日に運営している。『ほげほげ』とは大洗の方言で「心ゆくまでたっぷりと」という意味である。

これまでの成果としては、知名度が徐々に上がり常連客が増えたこと、イベント時は他団体との協力もできたことなどがあげられる。しかし、2016年4月にカフェ利用者にアンケート調査を実施したところ、「外からカフェだとわかりにくい」等の意見が寄せられ、一部の人にしか認識されていないことが窺われた。また、今までの活動を振り返ったところ、深刻な人手不足ゆえに地域からの依頼にも思うように対応できず、地域連携がなお弱いという問題点も見つかった。以上のことから、今年度改善すべき課題は、カフェの認知度の向上、人手不足の解消、地域との連携の3つである。

<プロジェクトの内容・目的>

●目的

髭釜商店街をはじめ大洗町の様々な団体と連携し、賑わいの継続、更なる発展のために、防災の町づくりや地域住民と観光客のネットワーク形成など多角的な視点から地域振興に携わる。

●内容

今年度はカフェ運営、イベント開催、情報発信に加え、カフェの認知度の向上、人手不足の解消、地域との連携に力を入れて活動を行った。また、商店街のジオラマ作成と「大洗ほげほげマップ」の改訂・増刷を実施した。さらに、大洗町でのイベント補助や大洗町商工会との連携を行った。

<活動日程>

通年	<ul style="list-style-type: none"> ・カフェ運営（隔週土曜日、大洗町のイベント時） ・大洗町商工会と連携し、商店街店舗の缶バッジを作成 ・【10月～】盲人松浦さんによる昔話の定期開催（月1で実施）
----	--

7月	<ul style="list-style-type: none"> ・バス釣り大会手伝い ・AQUA SOCIAL FES!運営補助 ・防災ゲームクロスロードイベントの開催
8月	<ul style="list-style-type: none"> ・ポエムde夏祭運営補助 ・「八朔祭」に参加
10月	<ul style="list-style-type: none"> ・ハゼ釣り大会の手伝い ・参加型音楽祭「ほげfes」開催
11月	<ul style="list-style-type: none"> ・茨城大学茨苑祭での活動PR ・あんこう祭りへの参加

12月	・茨城大学生地域活動発表会
1月	・大学での講義「茨城学」での活動PR

プロジェクトの成果報告

<今年度の成果>

●カフェの認知度向上

大洗町の髭釜商店街の空き店舗を活用した「ほげほげカフェ」を隔週土曜日と大洗のイベント時に合わせて運営した。カフェ利用者を対象に実施したアンケート調査よりカフェの認知度が低いことが窺われたため、今年度はカフェの認知度向上のための活動に力を入れた。7月には「防災ゲームクロスロード」、10月には観光客からの持ち込み企画である参加型の音楽祭「ほげfes」を昨年度に引き続き行った。

防災ゲームクロスロードは、自分が災害に遭遇したとき、どう行動するかを考え、意見交換を行うシュミレーションゲームである。今年度はカフェだけでなく、「大洗町親子ふれあいセンターきらきら」でも行った。これによって、カフェの認知度向上だけでなく、町民や学生の防災意識を高めることができた。

ほげfesでは、大学内のサークルや地域から演奏者としての参加の他、観客として多くの地域住民や観光客が集まり幅広い層の交流の場とすることができた。イベントを通して大洗応援隊!の認知度を上げることができた。



「大洗町親子ふれあいセンターきらきら」における防災ゲームクロスロードの様子

●人手不足の解消

大学構内でのポスター掲示やチラシの配布のほか、大学の講義内で大洗応援隊！の活動の紹介を行い、協力者を募った。しかし人手不足の解消には至らず、人を集めることの難しさを実感した。活動に参加している学生が減少していく中で、今までと同じような活動を続けていくことは、学生一人一人の負担が増えてしまうため困難であると考えられる。今後も人手不足の解消に力を入れつつ、少人数でもできることを考えて活動を続けていきたい。

●地域との連携

商工会と連携し、商店街の多店舗の缶バッジづくりを行った。商工会との交流が増えたことにより、直接的に地域の学生に対しての要望を知ることができた。また、商店街のジオラマ作りを行った。「大洗ほげほげマップ」は、2013年に作成され、昨年度改訂をしたが、店舗情報の変更が多く見受けられたため、今年度も商店街の店舗を回り、変更点を伺った。さらに、「大洗ほげほげマップ」への新店舗の追加・変更点の修正・増刷を行い、大洗町の商店街の現在の情報を知ってもらうことができた。地域住民の方から昔話会をカフェ内で行いたいという要望を頂き月に

一回の頻度で実施した。その結果、カフェが大洗町における歴史を伝える場所となり、地域により密着した活動を行うことができた。



商店街ジオラマの一部



昔話会の様子

<外部からの評価>

大洗町の議員の方から、「商店街や商工会の方々は、『ほげほげ』といえば「大洗応援隊！」で運営しているカフェのことだと認識しており、町長も、商店街の話になると、『ほげほげ』という言葉が出てくる。」というお言葉をいただき、カフェの認知度を広げることができたと感じた。また、お客さんからは、「イベントで初めてここへ来たが、また利用したい。」「ここに来れば仲間に会えるから、カフェの存在がありがたい。」「商店街には休憩できる場所がないので、足休めの場として利用できるカフェの存在はありがたい。」といった声を多く頂き、「大洗応援隊！」の活動の継続を望む多数の声を聴くこ

とができた。



カフェ店内の様子

<今後の課題と展望>

今年度はカフェの知名度を上げることや、さらなる地域との連携に力を入れた。その結果、カフェに来る人の年齢層も昨年度までと比べ、より広がった。「大洗応援隊！」の活動に興味・関心を持ってくれる住民の方も現れたり、他のボランティア団体と相互協力も生まれたりしており、活動の幅を徐々に広げられている。「10年先も続くカフェ」を目指し、これからも町の活性化に尽力していきたい。

茨大聞き書き隊Notes

ボランティア

地域交流

代表者：人文学部人文コミュニケーション学科 4年 菊地 ほのか

連携先

たすけあいセンター「Juntos」

ン学科 1年)

松江 まお (人文学部人文コミュニケーション学科 2年)

ア リ マ (人文学部 研究生)

顧問教員

石島 恵美子 (教育学部・准教授)

参加者

菊地ほのか (人文学部人文コミュニケーション学科 4年)

大枝 俊貴 (人文学部人文コミュニケーション学科 3年)

菊地 雅代 (人文学部人文コミュニケーション学科 3年)

袖山 良美 (人文学部人文コミュニケーション学科 3年)

外間 花怜 (人文学部人文コミュニケーション学科 3年)

飯塚子都香 (人文学部人文コミュニケーション学科 2年)

岩崎 彩 (人文学部人文コミュニケーション学科 2年)

川原涼太郎 (工学部機械工学科 2年)

田島 彩花 (人文学部人文コミュニケーション学科 2年)

山口紗奈子 (人文学部人文コミュニケーション学科 2年)

大村みるほ (教育学部情報文化課程 1年)

鬼澤 麻美 (人文学部社会科学科 1年)

坂爪 礼衣 (人文学部社会科学科 1年)

鈴木 真由 (人文学部社会科学科 1年)

倉持 ゆり (人文学部人文コミュニケーション学科 1年)

プロジェクトの概要

●立ち上げの背景

2015年9月の関東・東北豪雨による水害で本学のある茨城県も大きな被害を受けた。

災害直後からこれまで、ボランティア等を通して被災した住民と接し、そこで耳にした水害の体験や教訓を広く伝えていきたい考えた学生を中心に2016年4月に立ち上げたのが本プロジェクトである。

また、水害から半年が経過して、「忘れられてしまいそうで悲しい」という住民もいた。我々が直接足を運び、話を聞いたり交流したりすることで、その不安も少なからず和らげられるのでは、と考えた。

●目的と方法

本プロジェクトの目的は、①水害を経験した人々から体験や教訓を聞いて冊子にまとめることと、②冊子やその内容を防災に活用すること、③地域の人々と交流することである。特に東日本大震災以降、いつ起こるかわからない次の災害に備えるために災害の教訓を残すことの意義が認められている。

冊子の作成にあたって「聞き書き」という方法をとった。聞き書きは、一方的な「語り」とは異なり聞き手の質問に話し手が答え

る形で行い、聞き手も話すことで相手の言葉を引き出すという双方向的なやりとりから生まれる。我々は「災害当時の行動」、「今日までの暮らし」、「誰かに伝えたいこと、教訓」の3つの質問を軸に、その場に応じてほかの質問を加えて行った。

プロジェクトの成果報告

●活動の主な流れ

4月	結成
5月	聞き書きに向けての準備
6～7月	聞き書き
8月	聞き書き、防災教育の準備
9月	聞き書き、防災教育に参加
10月	聞き書き、冊子の編集
11～1月	冊子の編集
2月	冊子完成
3月 (予定)	冊子の配布・設置、常総市での報告会に参加

●聞き書きについて

聞き書きは豪雨で大きな被害を受けた常総市を中心に行った。そのため聞き書きを実施する前に質問をよく検討しメンバー同士で練習をした。また水害や防災についての勉強会やNPOと住民の交流会・ワークショップにも参加した。



参加したワークショップでの様子

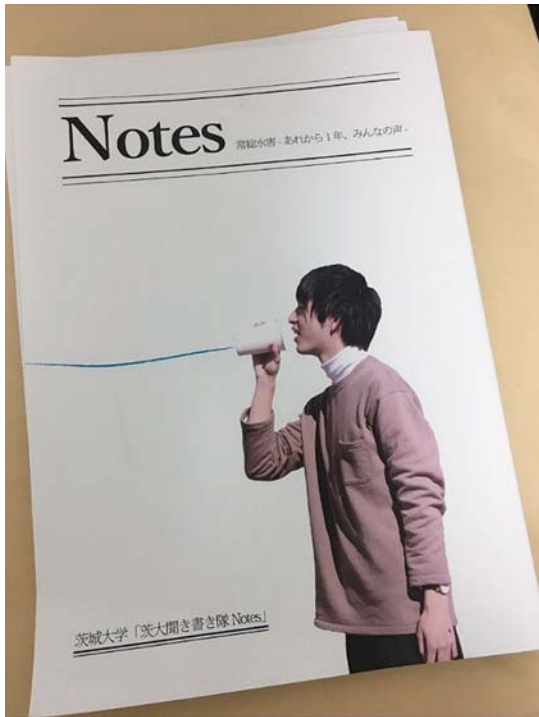
話し手は被災した人に限らずボランティア等を通して水害を経験した人など幅広く想定し、性別や年齢、職業や被害状況などに偏りが出ないように努めた。当初は連携先に協力いただきながら話し手を探していたが、対象の偏りをなくすため、また少しでも地域との交流を深めるために、現地を歩いたり地域のイベントに参加したりして出会った人に聞き書きへの協力を依頼していった。

聞き書きを通して、協力いただいた方々からは「話を聞きに来てくれるのがうれしい」、「意義のある活動だからしっかり行ってほしい」といった声をいただいた。

聞き書きの様子



冊子の編集にあたっては、まず聞き書きの内容をすべて文字起こし、次に不要な部分の削除や話の順番の入れ替えなどをして文章を整えた。その後メンバー間で校正を行ったものを話し手に確認してもらい、原稿が完成した。文章はすべて話し手の言葉のみでまとめ、読者がリアルに感じられるようにした。また、表紙や誌面のデザインは、水害を経験していない人にも興味をもってもらえるよう意識した。



ロスロード」の問題作成など)の運営を行った。

我々が派遣された学校の先生方からは、「子供たちに寄り添う姿に感激した」、「子供たちのレベルをうまく考えていた」、「子供たちが自分で考え判断することができた」などと言っていただいた。我々にとっても、これからの地域の防災を担っていく子供たちと防災について考えることができた大変貴重な機会であった。参加した学生からは「自分も防災について学べた」、「継続的に行っていくべき」という感想や意見が出た。



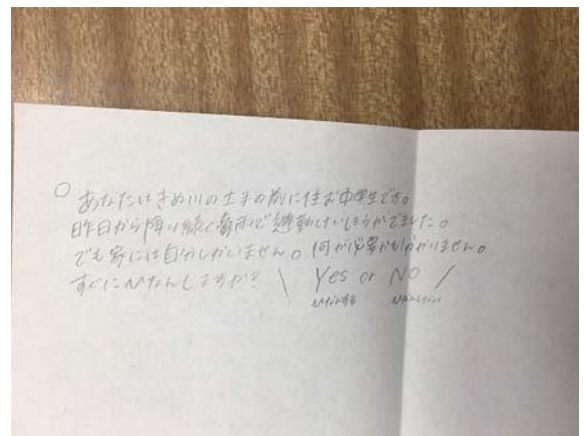
完成した冊子



「クロスロード」進行の様子

●防災教育への参加

聞き書きの内容の活用ということで、9月に常総市の小中学校で一斉に行われた防災教育に参加した。その際、本プロジェクトのメンバー以外の学生6名にも協力してもらった。小中学校の先生方と連携して聞き書きの内容をもとに防災ゲーム「クロスロード」の問題を作成し、当日は学生1～3人組で各学校に行きゲームの進行やワークショップ（「ク



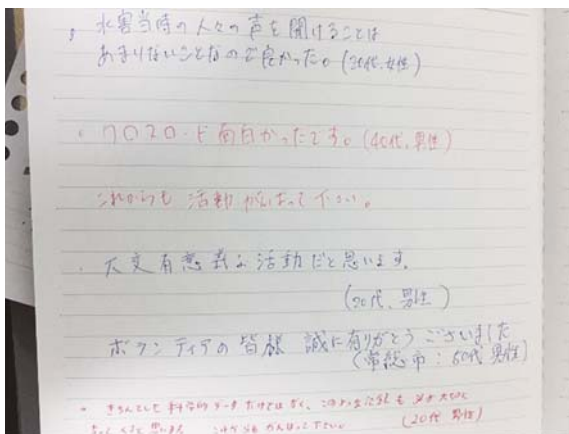
ワークショップで中学生が考えた問題

●活動の紹介

活動や聞き書きの内容を広めるため、複数のイベントで発表や展示を行った。大きなものでは本学の大学祭「茨苑祭」が挙げられる。関東・東北豪雨では大きな被害をうけなかった水戸で行うということで、なるべく多くに人の興味を引き付けられるように、ポスター展示だけでなく箱と照明を使った展示や「クロスロード」の体験を行った。2日間で100人以上に立ち寄っていただき、「水害当時の人々の声をきけてよかった」、「このような記録が必ず大切になるだろう」といった感想をいただいた。



箱に聞き書きの内容を貼った展示



茨苑祭でいただいた感想

常総市では9月の「復興祈念式典・シンポジウム」で活動の紹介をさせていただいた。

●活動の紹介：メディア

私たちの活動は、新聞やテレビ、雑誌に取り上げていただいた。その一部をここに掲載する。



東京新聞 2016年10月4日付 24面



旺文社「螢雪時代」2016年10月号より

まなびの輪 ～大洗町との協働～

教育・研究

ボランティア

課外活動

地域交流

国際交流

代表者：人文学部人文コミュニケーション学科 3年 野中 萌

連携先

大洗町役場 まちづくり推進課
大洗町立大洗小学校
大洗町立第一中学校

顧問教員

横溝 環 (人文学部・准教授)

参加者

阿部 梓 (人文学部人文コミュニケーション学科 4年)
井上 美里 (人文学部人文コミュニケーション学科 4年)
上野奈緒子 (人文学部人文コミュニケーション学科 4年)
軽部 蓮 (人文学部人文コミュニケーション学科 4年)
川本 早紀 (人文学部人文コミュニケーション学科 4年)
藤井 駿丞 (人文学部人文コミュニケーション学科 4年)
横田 千尋 (人文学部人文コミュニケーション学科 4年)
吉岡 杏 (人文学部人文コミュニケーション学科 4年)
野中 萌 (人文学部人文コミュニケーション学科 3年)
木下絵美梨 (人文学部人文コミュニケーション学科 3年)
鈴木 美生 (人文学部人文コミュニケーション学科 3年)

東谷 藍 (人文学部人文コミュニケーション学科 3年)
飯塚子都香 (人文学部人文コミュニケーション学科 2年)
井口 葵 (人文学部人文コミュニケーション学科 2年)
入江 咲紀 (人文学部人文コミュニケーション学科 2年)
海老原千祐 (人文学部人文コミュニケーション学科 2年)
村上柚香里 (人文学部人文コミュニケーション学科 2年)
森井 美桜 (人文学部人文コミュニケーション学科 2年)
渡邊 駿平 (人文学部人文コミュニケーション学科 2年)
綿引 千晴 (人文学部人文コミュニケーション学科 2年)
倉持 ゆり (人文学部人文コミュニケーション学科 1年)
仲川 千尋 (人文学部人文コミュニケーション学科 1年)

プロジェクトの概要



本プロジェクトは、大洗町役場・ボランティアと連携し、大洗町在住の外国人の日本語コミュニケーション能力の向上及び、多文化共生のまちづくりの推進を目的とする。今年度は、昨年度の反省を生かし、①活動の引継ぎシステムの構築による「活動の継続」、②中学校での取り出し授業支援を新たに開始することによる「活動の発展」を目標とし活動を行った。前者は活動の定着、後者は小学校と中学校をつなげることを目的としている。具体的な活動内容は、①大洗町在住外国人が日本語を学習できる「日本語教室」、②大洗町立大洗小学校・大洗町立第一中学校にて日本語指導サポーターとして参加する「取り出し授業」、③日本人と外国人が気軽に交流できる場として設ける「おしゃべり広場」の3つの柱から成る。これらを通じ、外国人の言語能力の向上並びに町民の交流・繋がりの拡大が見込まれ、外国人の力が地域で生かされることを目指す。

プロジェクトの成果報告

本プロジェクトでは、以下の3つを柱として活動した。

(1) 日本語教室

日本語教室とは、大洗町在住外国人のニーズを受け、昨年度から開設・実施している日本語学習の場である。原則として、第2・4水曜日の18:30~20:00に大洗町役場の会議室で開催している。

日本語教室を定期的かつ継続的に開催することにより、本活動は大洗町在住外国人の間でいつでも安心して日本語が学べる場として浸透・定着しつつある。その結果、新たな日本語学習者やボランティアも増えている。

さらに、大洗町在住の日本人にも共に主体となって活動してもらえよう、日本語ボランティア養成講座を開講した。



日本語教室の様子

(2) 取り出し授業

取り出し授業とは、日本語指導が必要な外国にルーツをもつ児童・生徒に対して、通常の授業とは別教室で教科指導を行うことである。成果として以下の3点が挙げられる。第一に、昨年度からの活動を継続したことで、大洗小学校の児童との関係が深められた。私たちの参加により、一人ひとりの児童が密度の高い学習をすることが可能になった。第二に、第一中学校のニーズに応じて、今年度からサポートを開始した点が挙げられる。これによって、より多くの児童・生徒をサポートできるようになったことや、隣接しているがこれまで交流の少なかった小学校と中学校が連携するようになった。第三に、まなびの輪のメンバーが学校行事(保護者会、運動会、学習発表会等)に参加することで、地域住民、特に外国人児童の保護者とのつながりを持つことができた。



保護者会の様子

(3) おしゃべり広場

おしゃべり広場とは、大洗町に住む外国人やボランティアとイベントを通して交流を深める活動である。今年度は、10月23日に料理教室、1月22日にお正月遊び体験教室を実施した。各回約40名、様々な年齢層及び国籍の方々に参加してもらえた。

料理教室では、食と舞踊を通しての異文化交流を目的とし、出身国に関係なく、インドネシア、フィリピン、ペルー、日本の料理を作って食べた。また、インドネシア、フィリピンのダンスを参加者全員で踊り、交流を深めた。



料理教室の様子

お正月遊び体験教室では、お正月遊びを通しての異文化交流を目的とし、日本の遊びである、かるたとすごろくを行った。インドネシアのお正月についても紹介してもらい、参

加者全員でインドネシアのお正月のダンスを踊った。



お正月遊び体験教室の様子

おしゃべり広場を開催することにより、私たちの活動を大洗町在住の人々に知ってもらえることができ、日本語教室に興味を持ってもらうきっかけとなった。

(4) その他の活動

メインの3つの活動の他に、大洗町の行事である盆踊りの夕べ・八朔祭のお手伝いをした。



盆踊りの夕べのお手伝いの様子

また、日本語教室で学ぶ日本語を用い、学習者とボランティアの枠を越えて学びを深め交流できる場としてクリスマスパーティーを開催した。



クリスマスパーティーの様子

日本語教室に参加しているインドネシアの方が通っている教会の誕生祭に招待されることもあった。普段は私たちが外国人を迎え入れる立場だが、この時は反対に、外国人のコミュニティに私たちが迎え入れてもらった。これまでも同様に、教会の収穫祭やクリスマスパーティーに招待してもらい、親睦を深めてきたが、これらにより、外国人に安心して日本語教室やおしゃべり広場などの活動に参加してもらえるようになった。



教会の誕生祭に参加した様子

(5) 全体の成果と課題

第一に、全学年によるメンバー構成にしたことで、常に経験者がいる状態になり活動をスムーズに引き継ぐことができた。

第二に、まなびの輪の活動が、大洗町在住の外国人、日本語指導ボランティア、大洗町役場の方々、私たちの誰にとってもあるのが

当たり前の場所になってきた。

日本語教室は、大洗町在住の外国人の要望から生まれ、大洗町役場や小学校といった公的機関の支援を受けて確立した。そして現在は、これらの機関と協働しながら活動が継続している。継続することで、「当たり前」「日常」となる。私たちは「日常」を第一に考えている。しかし「イベント」を軽視しているわけではない。皆でゲームやダンス、料理をすることによって親睦が深まり、さらに、それは日本語を勉強する意欲につながってくると考えられる。このように、「イベント」が「日常」を彩り、継続する力になっていく。



今後の課題として、日本語教室参加者のデータベースの整理・活用、地域在住の日本語指導ボランティアを増やすこと、日本語教室に来る小学生の教科指導のための教材開発、そして更なるニーズ調査が挙げられる。

あみゆめカフェ

～知って、好きになって、発信する 未来に繋げるカフェづくり～

課外活動

地域交流

代表者：農学部資源生物科学科 2年 中原 沙彩
農学部地域環境科学科 2年 小貫えみり

連携先

阿見町役場

顧問教員

福与 徳文（農学部・教授）

参加者

阿蘇 日和（農学部資源生物科学科 2年）
小貫えみり（農学部地域環境科学科 2年）
加来 萌菜（農学部資源生物科学科 2年）
河添 京（農学部資源生物科学科 2年）
黒坂 愛美（農学部資源生物科学科 2年）
鈴木 美果（農学部生物生産科学科 2年）
高木明香莉（農学部資源生物科学科 2年）
田口真秀子（農学部資源生物科学科 2年）
中原 沙彩（農学部資源生物科学科 2年）
滑川 晶子（農学部資源生物科学科 2年）
細川 寛（農学部資源生物科学科 2年）
前田 衣美（農学部資源生物科学科 2年）
丸田 敬子（農学部資源生物科学科 2年）
山田 尚主（農学部資源生物科学科 2年）

プロジェクトの概要

●活動背景

水戸で生活していた大学一年生のとき、阿見について周りの人に尋ねると、「アウトレットはあるよね」「広い農場はあるらしい」などの返答は返ってくるが、あまり詳しいことが分からなかった。農学部のキャンパスがあり、学生がいるにもかかわらず、阿見町の情報を耳にすることが少ないため、もっ

と町の情報発信が必要だと感じた。また、地域について考える授業「茨城学」からも影響を受け、自分たちも積極的に町について知り、行動を起こすことが必要だと考えた。さらに、自分たちの食への興味も後押しし、「阿見を知って、好きになって、発信する」のコンセプトのもと、阿見の農産物を使った料理を提供するカフェイベントを企画するに至った。

●活動目的

学生と町民との交流の場を作り、町についての情報交換を活発化させ、さまざまな人に阿見町について知ってもらうことを目的としている。

●イベントの内容

町の公共施設において、町民と学生をターゲットとしたカフェイベントを開いた。カフェでは阿見町の農産物を使用した軽食やスイーツを販売した。また、メニューの考案、調理は自ら行った。お客様に対しては、阿見町や、茨城大学農学部の地域と関わる団体についての情報発信を行った。



カフェ当日の様子



7月カフェ後の集合写真

以下の日程でカフェイベントを開催した。
また、形式は異なるが、農学部学園祭である
鋤耕祭においても町の情報発信を意識した
出店を行った。

第1回 7月23日(土)

鋤耕祭 10月29日(土)・30日(日)

第2回 11月26日(土)・27日(日)

①メニューの紹介

土浦保健所の指導のもと、町の旬の食材を
使用するメニューを考案した。

7月カフェ

場 所 本郷ふれあいセンター1階ロビー
来客数 51人

メニュー

- *ラタトゥイユ
- *枝豆パウンドケーキ
- *かぼちゃパウンドケーキ

ラタトゥイユは、野菜以外には塩とオリーブ
オイルのみを使用し、素材の味を生かした
調理をした。パウンドケーキは、かぼちゃの
量を多くしたり、枝豆を粗くつぶしたり等、
風味と食感を残すために工夫をした。

鋤耕祭

メニュー

- *かぼちゃワッフル
- *さつまいもワッフル

バターナッツカボチャの水分の多い点を生
かしたモチモチ触感のワッフルと、黒ゴマで
サツマイモ本来の甘さを引き立てたしっとり
したワッフルに仕上げた。

11月カフェ

場 所 本郷ふれあいセンター1階ロビー
来客数 1日目：39人
2日目：24人

メニュー

- *人参ポタージュ
- *ゆずマフィン
- *サツマイモクッキー
- *ゆず紅茶

~あみゆめカフェ Menu~

- ・にんじんポタージュ&バゲット 300円
シンプルな味付けで野菜本来の甘みを存分に味わえます。丹サクサク、中ふれふれのバゲットがポタージュとよく合います。
- ・ゆずマフィン 300円
さわやかな柚子の香りが口の中に広がります。トッピングの柚子ピールのほろ苦さがアクセントになっています。
- ・さつまいもクッキー 100円
サクサク食感。素朴な味わいでどこか懐かしさを感じられます。

Drink
コーヒー(HOT) 100円
ゆず紅茶(HOT) 100円
アイスコーヒー/ティー 無料

今回はこちらの方々からのご協力をいただいております。
にんじん...阿見サンクラブ 実盛さん
ゆず、玉ねぎ...阿見産直センター
じゃがいも...阿見サンクラブ 寛田さん
バゲット...美のつばやき(マイアミショッピングセンター)

〈11月カフェのメニュー表〉

阿見町内には自宅の庭にゆずの木を持つ農家が多く、旬の時期には直売所等にも多く出回る。お客様から特に好評だったのがゆずマフィンだ。アクセントのゆずピールも手作りであり、レシピについて知りたいという声も多く頂いた。



ゆずマフィン

～お客様の感想の一部～

“かぼちゃのケーキが美味しかったです。外サクサク中しっとりで、とても美味しかったです。”

“ゆずマフィン、盛り付けもきれいでとても美味しかったです！ 上に載っていたゆずがよかったです。ゆず紅茶は思ったよりゆずの味がして美味しかったです！ 個人的には酸味があってとても好き。”

②お客様との交流ツールの紹介

カフェ開催時には、地域の方と私たち学生が交流するためのツールとして、以下のようなものを用意した。

- ・「クロスワードパズル」：阿見町の魅力や、地域で活動する農学部について、解きながら知ってもらった。
- ・「阿見のいいところマップ」：阿見町の形をした大きな模造紙に、町のいいところを

書き入れてもらうことで町のよさが見える形になった。例えば、“適度に田舎なところ”、“空が広いところ”、“霞ヶ浦のサイクリングロード（つくば霞ヶ浦りんりんロード）と稲田と蓮根田の景観”、“林が多く夏でも涼しい。ウグイスやカエル、ウサギなどとも出会える！自然を楽しめる良いまち”などのコメントが書かれた。

- ・「阿見の隠れた魅力発見キャロット」：阿見町内の魅力あるスポットについて取り上げ、訪れたことのない場所にシールを貼ってもらうことで、その場所に興味を持ってもらおうと考えた。

これらのツールを話のきっかけとして、町民の方々から町や茨城大学に対する率直な考えを聞くことができた。“大学生は町と連携してPR活動を行ってほしい”、“大学が何をしているのか興味がある”などの声を頂いた。



阿見のいいところマップ

③イベントの宣伝について

次のような手段で宣伝を行った。

- ・チラシの掲示（大学内、あみプレミアム・アウトレットなど）
- ・会場近くのショッピングセンターでのチラシの配布
- ・町の広報誌「広報あみ」への掲載
- ・ラジオでの宣伝（牛久コミュニティFM）
- ・SNS（ツイッターやホームページ）



7月カフェのチラシ



阿見観光協会のブログでの紹介

④お客様からの声（アンケートから抜粋）

“クオリティー高い！オイシイ！掲示物も工夫されていて面白い。お客さんと店員さんのキョリが近くてステキです”

(20代 女性)

“発見キャロット、面白かったです。どんな結果が出るか気になりました。”

(20代 女性)

“‘食’は健康の源なので、学んでいることをどんどん発信してください。応援しています。”

(40代 女性)

“学生の方とお話しできてよかったです”

(60代 女性)

プロジェクトの成果報告

活動を行う中で、地域の方々と関わり、町についての情報を得られた。阿見町役場からは、観光パンフレットからの情報をはじめ、様々な情報を得られた。カフェのお客様には、自分たちが調べた町の情報を発信できた。また、町の農家とのつながりを持ったことで、町の農産物について自分たちが知ることができたことに加え、お客様にも知ってもらうことができた。

成果① 役場との協力による情報発信

地域への影響力の大きい役場と協力できた

ことは、情報源、情報発信源として大きな成果であると考えている。阿見での活動を始めるにあたり、アドバイスをいただきに阿見町役場を訪問したことがきっかけで、阿見町役場の農業振興課・商工観光課の職員の方々と繋がりを作ることが出来た。広報あみお知らせ版には、11月カフェの開催について掲載していただいた。夏季休業中には、阿見町の教育長との対談も行い、活動の報告と、地域交流についての意見交換をし、激励していただいた。カフェ当日の様子については、あみ観光協会が運営するブログ「あみプロ」で紹介していただいた。

成果② 町外の人への情報発信

第二回目のカフェが、町外、県外からも参加者が訪れるアームレスリング大会と同日同会場での開催となり、様々な人に町についてアピールできた。会場確保の段階では開催が危ぶまれたが、商工観光課の方々の協力のもと無事開催まで漕ぎつけた。

●反省と今後の展望

① 阿見町について多くの人に知ってもらうという目標に対して

カフェでの掲示やお客様との会話での交流により、阿見町の観光スポットや農産物、また茨城大学生の活動についても紹介すること

ができ、お客様への情報発信はできたと感じている。一方反省として、交流で私たちが得た情報を、さらに調べて発信することが不十分だったと感じている。今後の活動では、聞いた話をメンバーで共有し、さらに、実際に耳にした町の行事へ参加するなどして情報を深め、発信したい。

② 活動計画について

イベントの回数は、計画より少ない2回となった。イベントを一回開催するための過程が予想していたよりも膨大であったことが大きな理由である。来年からも活動を継続させていくためには、毎回全てのレシピを変えるのではなく、定番のメニューを用意して旬に合わせて使用する野菜を変化させるなどの工夫をする必要があると考えている。

③ 活動場所について

計画では活動の後半を町外で行い町の情報発信に力を入れる予定であったが、全て町内での開催となった。場所を探す都合上、町内での開催がスムーズであったことが主な理由であった。しかし、お客様からは学生や大学に対して距離を感じているような声も聞かれたため、町の情報発信だけでなく、大学と地域の橋渡しのような役割を担うことも必要だと感じた。今後、あみゆめカフェが学生と地域の方々が関わる恒例のイベントとなり、交流を活発化する存在となることが望まれる。

●活動を通しての感想

このプロジェクトを始めるきっかけとなったのは、地域と関わりたいという思いに加え、自分たちで一から何かを始めたいという気持ちであった。「あみゆめ」という名前の由来も、阿見で皆の夢を叶えたいというところからきている。いざ活動を始めてみると、週に一回行っていた会議の進め方やメンバーの役

割分担、また関わりを持った方々との連絡など、プロジェクトの内容以前に考えさせられることも多かった。しかし、分からないことが多い分、先輩方や先生方をはじめ多くの方々の助けをいただき、多くの学びを得た。このような挑戦ができる環境には本当に感謝しており、活動ができてよかったと感じている。

種まきサミット

ボランティア

地域交流

代表者：人文学部人文コミュニケーション学科 3年 大枝 俊貴

連携先

石塚サントラベル（株）

顧問教員

伊藤 哲司（人文学部・教授）

参加者

大枝 俊貴（人文学部人文コミュニケーション学科 3年）

袖山 良美（人文学部人文コミュニケーション学科 3年）

生田目 崇（人文学部人文コミュニケーション学科 3年）

岩崎 彩（人文学部人文コミュニケーション学科 2年）

高橋 佑奈（人文学部人文コミュニケーション学科 2年）

飯塚子都香（人文学部人文コミュニケーション学科 2年）

田島 彩花（人文学部人文コミュニケーション学科 2年）

大川 日和（教育学部養護教諭養成課程 1年）

大村みるほ（教育学部養護教諭養成課程 1年）

鬼澤 麻美（人文学部社会科学科 1年）

河合 舞香（人文学部社会科学科 1年）

川崎 夏海（教育学部養護教諭養成課程 1年）

木暮 聖（工学部都市システム工学科 1年）

鈴木 真由（人文学部社会科学科 1年）

高橋絵梨子（人文学部社会科学科 1年）

春山 陽介（教育学部情報文化課程 1年）

水戸部麻美（人文学部社会科学科 1年）

プロジェクトの概要

●背景

このプロジェクトの母体であるサークル「茨大東北ボランティアサークルFleur」は2012年創立以来、活動を継続する中で東北ボランティアバスへの参加者の減少・震災を知らない世代の増加といった問題に直面してきた。

また、行政の面でも2016年度をもって「集中復興期間」から「復興・創生期間」に移行し、大きな変化を見せた。このような状況の中で風化が進んでいくことは、震災における風評被害・支援の断絶・防災意識の低下を招く。

6年目という狭間の年に大学生だけで活動するのではない、世代を横断した活動が重要であると考えた。

●目的

東日本大震災を語り継ぐこと
参加者の防災意識向上

●連携方法

本プロジェクトでは、東日本大震災直後から現在までボランティアバスを出し続ける、石塚サントラベル(株)様との連携を行っている。

具体的な連携方法としては、大きく二点ある。一点目は、高校生への参加に関する声かけの段階にて助言を頂いた。2011年から続く石塚ボランティアバスには様々な人が参加し、持続的な活動を行っている。その中には高校生や中学生の姿もあり、今回プロジェクトを行うにあたりアドバイスをもらった。

二点目は、当プロジェクト参加者と実施する「東北ボランティアバス」に協力いただいている。すでに行った座学的な活動を超えて、実感として震災をとらえることができるような企画作りに助言頂いている。(2017年2月28日現在)

●活動日程

プロジェクト「種まきサミット」の流れは、取材と種まきサミット会に大別される。

・取材

取材段階では、東日本大震災により多大な被害を受けた福島県いわき市を中心とした視察を行った。2016年6月4日、12月4日、12月11日の計3回いわき市久之浜地区の復興商店街「浜風商店街」を訪れた。「からすや食堂」の御夫婦を中心とした皆様から被害状況などの説明をうけた。

2017年1月13日には、同地区の防災拠点施設や四倉地区「道の駅よつくら港」を視察した。この視察にはのちにサミット会で活動報告を行う、宇都宮大学学生プロジェクトUPのメンバーも参加した。

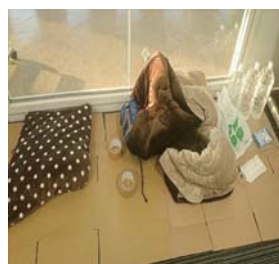


いわき市「浜風商店街」の皆様と

また、7月24日には、いわき市内の商業施設「いわき・ら・ら・みゅう」にて、いわき市観光物産センター様から被害状況や復興具合の説明を頂いた。同施設では、「2011 3.11いわきの東日本大震災展」も開催中であり、そちらの視察も行った。これらの取材成果は、種まきサミット会の展示や、会の内容に応用した。



視察「いわきの東日本大震災展」



取材内容を踏まえた展示

・種まきサミット会

会は、第一部と第二部に分かれる。

第一部では、宇都宮大学学生プロジェクト「UP」や笠間市絆プロジェクト・大洗応援隊・水戸市生涯学習センターヤングボランティア講座ボランティアバス参加者の方々にも出席頂き、活動発表や震災について専門性の高い座談会を行った。座談会は、「震災ボランティアのきっかけ」「震災ボランティアの中で最も印象に残ったこと」「復興のためにできること」をテーマとした。話題①「きっかけ」としては、自分の親族や姉妹の影響・大学で機会を得たなどといった意見が出た。話題②「最も印象に残ったこと」としては、被災地の人とのつながりや震災遺構についてなどの意見が見られ、体験の共有が図られた。話題③「復興のためにできること」では、午後のワークショップへの話題提供が行われた。



座談会の様子

第二部では、高校生も踏まえた震災に関するワークショップを開催した。ワークショップは、「クロスロード」と「ワールドカフェ」の二種類行った。「クロスロード」では、災害時の対応についてゲーム形式で意見を出し合った。「ワールドカフェ」では、第

一部の座談会でも話し合った「復興のためにできること」について再度意見を出し合った。それぞれ発表を担当するなど、高校生の積極的な参加が見られた。



ワークショップの様子

また、当会について定期的に想起することを願いキャンドル作りも行った。



キャンドル作り

プロジェクトの成果報告

プロジェクト全体の成果として、一番大きいのは関係先を拡げることができたということだ。県外では、福島県いわき市「浜風商店街」の皆様との交流を深めることができた。茨城県内では、常磐大学高校の皆様・桜ノ牧高校JRC部の皆様・生涯学習センターの皆様と太いパイプを持つことができた。実際に、生涯学習センターでは同主催の催しである

「ネットワークフォーラム」にて活動報告を実施するなど連携が続いている。

また、種まきサミット会には、大学生19名、高校生13名、計32名が参加した。大学生のうち2名が宇都宮大学からの参加、高校生は5校からの参加となった。参加者からは、第一部について、

「今日の体験を通して、震災のボランティアの活動でどのようなことが行われているのが分かりました。3.11からもうすぐ6年が経過しますが、今日の経験を活かし、震災での教訓を忘れないようにしたいです。」

「震災から6年が経ち、忘れかけていたことや、改めて考えさせられることが多くあった。やはり、東日本大震災を忘れてはいけなし、まだまだ自分ができることもあるんだなと思いました。」第二部について、「学校が違うだけでなく、年齢までも違う方々とここまで、話し合う場というのはとても少ないと思うので、今日はいい体験ができました。」

「最初は種まきサミットって何だろう？と考えていたのですが震災についての話し合い、自分が普段思っていたことを発言できたり、他の人の考えと自分の考えを共有できたのが楽しかったです。また茨大生、宇大生、ボラ

ンティアに参加した高校生には行動を移すことの大切さを学びました。また機会があったらぜひ参加したいです。」といった感想を得ることができた。震災について深く考え、行動に移す機会を創出できたと考えている。

また、当プロジェクトに参加した高校生2名と、連携先の石塚観光の協力で3月11日、12日に「震災スタディーツアー」を企画している。これは、会の中で「復興のためにできること」として出た”直接被災地に足を運ぶ”、“今の復興の進み具合を知ってもらおう”という意見から、企画されたものだ。このように、震災ボランティアについて高校生や他の年代を巻き込んでの活動につなげることができたことは大きな成果であった。

・今後の課題

今回は、高校生をメインの対象としたが、「震災を知らない世代」はもっと低年齢層にある。このような世代に震災を語り継いでいくことが可能な仕組み作りや関係の構築を行っていかなければならない。

また、今回のような活動を単発で終わらせるのではなく、継続的な活動としていかなければならない。



種まきサミット会参加者

君とチャレンジ ～障害のある人の社会参加支援プロジェクト～

教育・研究

課外活動

ボランティア

地域交流

代表者：人文学部社会科学科 3年 首藤 沙姫

連携先

社会福祉法人くれよん・くれよん工房、社会福祉法人愛信会・指定障がい者支援施設幸の実園、社会福祉法人実誠会・障害者支援施設なるみ園、社会福祉法人茨城県社会福祉事業団・茨城県立あすなろの郷、NPO法人茨城の「専攻科」を考える会・福祉型専攻科シャントイツクバ、有限会社ココ・ファーム・ワイナリー、ATTAKA障害者自立支援プロジェクト

顧問教員

土屋 和子（人文学部・講師）

参加者

高野 文佳（人文学部社会科学科 4年）
箕輪 美紅（人文学部社会科学科 4年）
會田 和樹（人文学部社会科学科 3年）
柏村悠太郎（人文学部社会科学科 3年）
佐藤 映理（人文学部社会科学科 3年）
首藤 沙姫（人文学部社会科学科 3年）
陣野 紗希（人文学部社会科学科 3年）
荒井 茄月（人文学部社会科学科 2年）
荒木 亮多（人文学部社会科学科 2年）
高崎 美優（人文学部社会科学科 2年）
中桐俊太郎（人文学部社会科学科 2年）
藤枝 光輝（人文学部社会科学科 2年）
舟橋 友樹（人文学部社会科学科 2年）

プロジェクトの概要

●プロジェクト立ち上げの背景

本プロジェクトは平成24年度から開始された「障害のある人への就労支援プロジェクト～地域と障害のある人とのつながりをつくる～」を発展させたプロジェクトである。

昨年度までに、私たちは「障害者雇用促進の環境づくり」を目的とし、「障害者雇用の実態発信」と「障害のある人への理解の場の提供」という2つのアプローチから活動した。

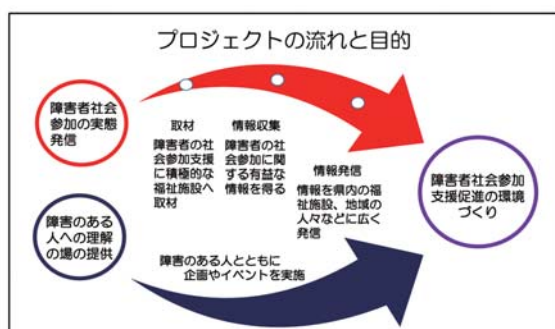
「障害者雇用の実態発信」では、インタビュー動画を5本制作・公開し、障害者の家族や茨城大学の学生を対象に、学習交流会や勉強会の開催を計6回行った。「障害のある人への理解の場の提供」では、障害のある人とその家族との懇談会や茨苑祭での共同出店、福祉施設利用者との交流といった、障害のある人との共同企画を実施した。また、企業経営者に対するプレゼンや、外部のプロジェクトとの連携にも取り組んだ。その結果、障害のある人・家族、福祉施設、障害者団体、行政、企業、経営者、地域住民、学生と出会い、交流することができ、障害のある人の就労を支える人々のネットワークの拡大や、プロジェクトの時間的規模の拡大を実感することができた。

しかし一方では、障害のある人や福祉施設の職員、企業の人事担当者のお話から、「就労継続支援から抜け出せない」「就労してもできる仕事に限られる」など、障害のある人にとって就労をめぐる課題がいくつもあるこ

とがわかった。その課題をなくすためには、地域の人々が障害者との共生社会への理解を深める必要があり、障害者のある人の社会参加についての情報発信が必要だと感じた。そこで、障害のある人の就労支援を広く捉え直そうと、プロジェクト名を「君とチャレンジ～障害のある人の社会参加支援プロジェクト～」へと変更した。

●目的

今年度は対象を企業に限らず、積極的に利用者の社会参加支援を行っている様々な障害者福祉施設取材し、得た情報もとにパネルや動画を制作・公開することで「障害のある人の社会参加の実態発信」を行った。また、障害のある人とともに企画やイベントを実施し、地域の人々と障害のある人が直接交流できる機会をつくることで「障害のある人への理解の場の提供」を行った。これら2つのアプローチから活動を行うことで、障害のある人の社会参加のための環境づくり促進を目指した。



●プロジェクトの活動内容

今年度は障害のある人の社会参加促進のための環境づくりを目標に3つの活動を行った。

1. 茨城県内および近郊で障害者の社会参加に力を入れている障害者福祉施設取材し

た。就労継続支援施設であるくれよん工房、幸の実園、なるみ園取材し、パネルとインタビュー動画を制作した。完成したパネルと動画を茨苑祭で公開した。就労支援以外の社会参加支援を行う施設であるシャンティつくば、あすなろの郷、ココ・ファーム・ワイナリー取材した。

2. 茨苑祭でくれよん工房と共同企画を行った。利用者と一緒に、くれよん工房で作った菓子類と小物類を販売した。
3. ATTAKA障害者自立支援プロジェクトに参加した。同プロジェクト主催のみとちゃん朝市へのボランティア参加も継続して行った。みとちゃん朝市の一周年を記念してパンフレットを作成した。

●活動日程

1. 障害者福祉施設の取材
 - ①くれよん工房
8月10日、9月20日
 - ②幸の実園
9月15日、11月2日
 - ③なるみ園
9月21日、10月17日
 - ④シャンティつくば
8月26日
 - ⑤あすなろの郷
1月18日
 - ⑥ココ・ファーム・ワイナリー
2月13日
2. 障害のある人との共同企画
茨苑祭
11月12日、13日

3. ATTAKA障害者自立支援プロジェクト

①運営会議(月1回)

7～11月、2月

②みとちゃん朝市(毎週日曜日)

7～12月、2月

※鳥インフルエンザにより一時活動停止

定例会(12～1月)、みとちゃん朝市(2月)

●連携先の紹介

(1) くれよん工房

社会福祉法人くれよんが運営する、茨城県水戸市にある障害者支援施設。くれよん工房設立の目的は、「障害が有っても無くても共に楽しく生きる」という理念を実現することにある。作業場は、障害のある人達だけの働く場ではなく、障害のある人もない人も共に力を合わせて働き、働くことによって社会参加する「共に生きる場」を目指している。

(2) 幸の実園

社会福祉法人愛信会が運営する、茨城県那珂郡東海村にある指定障がい者支援施設。利用者が家庭的な雰囲気の中でゆとりのある暮らしを実践しながら、社会参加の機会を多くもち、地域の人々とのかかわり合いの中で潤いある人生が過ごせるように支援している。毎月第1第3土曜日に敷地内にて「さちのみ朝市」を開催しており、とれたての野菜などを利用者が直接販売している。

(3) なるみ園

社会福祉法人実誠会が運営する、茨城県那珂市にある障害者支援施設。平成14年8月1日に開所した。知的障害のある方々が、共同生活や農作業などを通して様々な支援を受け、社会参加を目指している。直売所「サンファームなるみ」を営業しており、利用者が商品の選別・袋詰めなどの就労訓練を行っている。

(4) シャンティつくば

福祉型専攻科シャンティつくばは、NPO法人茨城の専攻科を考える会が障害者総合支援法に基づく自立訓練（生活訓練）事業を行うために開設した。自立した地域生活を営むことができるように、必要な生活能力の維持・向上などの支援をしている。韓国の特別支援学校に訪問・報告を行う等、国際交流を行っている。



教室の様子

(5) あすなろの郷

茨城県水戸市内原にある指定障害者支援施設及び病院、医療型障害児入所施設・療養介護事業所。一人ひとりの人権を尊重し、利用者の日常生活上の援助や日中活動を支援するとともに、生活自立に向けた総合的なサービスを提供している。また、利用者の能力に合わせて日常生活における買い物などを実施している。

(6) ココ・ファーム・ワイナリー

栃木県足利市にある有限会社。隣接する障害者支援施設ころみ学園から原材料であるブドウを仕入れワインに加工している。ころみ学園の利用者は、就労支援ではなく生活介護の一部として「仕事」と呼ばれる生活訓練を行っている。



見学の様子

(7) ATTAKA障害者自立支援プロジェクト
水戸市内12の企業経営者が立ち上げ、2015年11月より活動を開始しているプロジェクト。後援には水戸市をはじめ、水戸商工会議所等が、共済には水戸保健福祉部障害者福祉課等が携わり、官と民の連携がなされている。「障害者と共存できる水戸」をイベントを通してPRし、地域の活性化を目指している。イベントの運営を障害者に任せ、朝市等を実施している。

●連携の方法

私たちは連携先として様々な障害のある人、障害者雇用・障害者福祉に取り組む、特徴ある企業や福祉施設を取り上げたいと考えているが、対象者の選定の際はプライバシーの保護、人権擁護などについて、様々な配慮が求められる。そのため、地域連携先の専門的助言を得ながら活動している。

プロジェクトの成果報告

●プロジェクト活動の実施内容と成果

今年度は、様々な種類の施設と新たに連携をはじめ、「障害のある人の社会参加の実態発信」「障害のある人への理解の場の提供」

という2つのアプローチから活動を行うことで、障害のある人の社会参加のための環境づくりを促進した。また、来年度に向けて、就労支援に限らずに障害のある人の社会参加に取り組んでいる施設を訪問することで、連携先が多様化し本プロジェクトの活動の幅も広がった。成果は以下の3点である。

1. 障害者福祉施設の取材、パネル・インタビュー動画の制作・公開

1) 実施内容

障害のある人の社会参加活動の存在を地域の人々に周知することを目的として、利用者の社会参加に力を入れる県内の障害者就労継続支援施設である幸の実園となるみ園を取材した。この2つの施設はどちらも農業に力を入れており、生産物を独自に朝市や直売所等で販売している。また、その販売に利用者が直接従事することで地域住民との交流を深めている。取材をもとに、施設の情報や利用者の社会参加についてまとめたパネルを制作し、茨苑祭で公開した。

障害のある人の社会参加に関するインタビュー動画の制作にあたって、障害者就労継続支援施設であるくれよん工房を取材した。くれよん工房を取材した理由は、障害者就労継続支援施設の運営の実情を知るためと、「障害のある人もない人もともに力を合わせて働き、働くことで社会参加する」というくれよん工房の考えが自分たちの活動と一致したためである。計2回訪問し、施設内の見学と経営者の方に対するインタビュー動画の撮影を行った。インタビュー動画は茨苑祭で公開した。

また、障害のある人の社会参加の幅の広さを地域の人々に周知することを目的として、就労支援以外の社会参加支援を行う施設である、シャンティつくば、あすなろの郷、ココ・ファーム・ワイナリーを取材した。



取材の様子



インタビューの様子

2) 成果

障害者就労継続支援施設を取材し、障害のある人の社会参加の実態について発信するためのパネルやインタビュー動画を制作することができた。

茨苑祭でのパネルの公開により、来場者の方々に、障害のある人が販売に携わって直接地域の人々と関わっていることや、障害のある人と直接交流できる場が身近にあることを知るきっかけを作ることができた。

取材した施設の方からは、「若い人たちが障害者福祉に興味を持ってくれてうれしい」といったコメントをいただいた。

本プロジェクト立ち上げ以降継続して行っているインタビュー動画の制作を、今年度はくれよん工房にご協力いただき行うことができた。茨苑祭での動画の公開により、障害者就労継続支援施設の運営の実態を伝えることができた。

障害者就労継続支援施設についての情報を

広く発信するために、今後はプロジェクトのホームページ上でも公開を予定し、現在準備を進めている。

また、シャンティつくば、あすなろの郷、ココ・ファーム・ワイナリーを取材し、障害のある人の社会参加が利用者の能力に合わせて、日常生活における買い物などの小さなものから国際交流という大きなものまで多岐にわたるという事実をつかむことができた。この情報も今後発信予定である。



パネル展示の様子

2. 障害のある人との共同企画

1) 実施内容

11月の茨苑祭で水戸市にある障害者就労継続支援施設くれよん工房と、お菓子・雑貨の販売をするお店を共同で出店した。当日は、くれよん工房で実際に販売しているお菓子や雑貨を、くれよん工房の利用者と協力して販売した。

また、くれよん工房からお借りしたパネルや、自分たちが取材した障害者就労継続支援施設である幸の実園、なるみ園を紹介するパネルや写真、本プロジェクト活動を紹介するパネルを公開した。

さらに、くれよん工房のインタビュー動画を公開した。

2) 成果

2日間の来場者数は昨年度の約2倍の615名で、13万9000円の売り上げがあった。くれよん工房のインタビュー動画を公開したことで、障害者就労継続支援施設を運営することの実情を発信することができた。

また、くれよん工房、幸の実園、なるみ園のパネルや写真を公開したことによって、それぞれの施設の情報を発信することができた。

来場者からは「今度は、お店に行ってみよう」というコメントが多数あり、お店の周知につながった。「障害のある人の就労について、社会人は知らない人がまだまだたくさんいると思います。皆さんの活動がもっと広まってほしい。」「大学祭という地域住民に開かれた場で、障害のある人への理解を深めることができるのは、良いことだと思う」といったコメントもいただいた。

茨苑祭という多くの方に開かれた場で障害者就労継続支援施設についての情報を学生や地域の方々に向けて発信することができた。また、障害のある人と共に販売を行ったことによって、多くの方が実際に障害のある人と接する機会を作ることができた。



販売の様子

3. ATTAKA障害者自立支援プロジェクトへの継続的参加とイベントの開催

1) 実施内容

ATTAKA障害者自立支援プロジェクトと連携し、「みとちゃん朝市」の開催を行った。私たちは、月に1回行われる運営会議に参加し、朝市の準備の段階から携わり、学生ならではの発想や視点からイベント内容について提案をしている。また、毎週日曜日に開催される朝市当日のスタッフとしても参加している。

ATTAKA障害者自立支援プロジェクトの活動が1周年を迎えたことを記念し、「みとちゃん朝市」についてのパンフレットを作成した。ATTAKA障害者自立支援プロジェクトに携わる方々に協力してもらい、コメントや朝市の楽しみ方など様々な内容に仕上げた。

「みとちゃん朝市」の活動内容は、毎週日曜日の午前7時半から10時半に千波湖周辺にて、主に海産物や野菜の販売、朝市食堂での朝食の販売、ビンゴ大会などを障害のある人とともにしている。



朝市の様子



朝市チラシ

2) 成果

ATTAKA障害者自立支援プロジェクトの活動に継続して参加したことを通して、本プロジェクトとの深い関係を築くことができた。また、私たちはATTAKA障害者自立支援プロジェクトの活動が1周年を迎えたことを記念し、「みとちゃん朝市」について広く周知するためのパンフレットを作成した。このパンフレットは、今後、水戸市内の小中学校に配布する予定である。

この活動はこれからも継続していく企画の一つであり、今後も学生ならではの発想や視点から、ATTAKA障害者自立支援プロジェクトを盛り上げていきたい。



朝市パンフレット表紙

●今後の展望

今年度は、障害者の就労支援から社会参加支援へと活動方針を転換した始まりの年であり、様々な障害者福祉施設を訪問することで新たに連携先が多様化し、プロジェクト活動の幅を広げることができた。

また、12月の「茨城大学学生地域活動発表会2016〈はばたく！茨大生〉」では、関彰商事や茨城県庁など、本プロジェクトに興味をもっていただける企業や団体から声をかけていただき、来年度に向けたつながりを作ることができた。

お声がけいただいた関彰商事では、障害者が接客などの仕事をするのが難しいということを知った。今後はこのような現状について一緒に考える機会を設けるため、イベント開催などを企画していきたいと考えている。

のらボーイ&のらガール 食農教育プロジェクト

教育・研究

課外活動

ボランティア

地域交流

代表者：農学部生物生産科学科 3年 佐々木 亮輔

連携先

のらつくす農園、久松農園、アサザ基金、グランドワーク笠間、そば打ち同好会

顧問教員

小松崎 将一（農学部・教授）

参加者

寺尾 正樹（農学部生物生産科学科 2年）
松岡 拓志（農学部地域環境科学科 2年）
佐藤 充（農学部地域環境科学科 2年）
山田 尚主（農学部資源生物科学科 2年）
高間 梨央（農学部生物生産科学科 2年）
増澤 龍一（農学部生物生産科学科 2年）
松山 直樹（農学部生物生産科学科 2年）
田辺 修都（農学部生物生産科学科 2年）
佐々木亮輔（農学部生物生産科学科 3年）
赤石 太郎（農学部生物生産科学科 3年）
小林 希美（農学部生物生産科学科 3年）
國分 拓也（農学部生物生産科学科 3年）
鎌塚 倫成（農学部生物生産科学科 3年）
飯村 拓也（農学部資源生物科学科 3年）
小野 涉（農学部資源生物科学科 3年）
五十嵐瑞稀（農学部地域環境科学科 3年）
木村 茉由（農学部地域環境科学科 3年）
久保田智大（農学部地域環境科学科 3年）
小林 佳奈（農学部地域環境科学科 3年）
向井 龍太（農学部地域環境科学科 3年）
渡邊亜由子（農学部地域環境科学科 3年）
青木 拓矢（農学部生物生産科学科 4年）
大澤 夏樹（農学部生物生産科学科 4年）

野口 真希（農学部生物生産科学科 4年）
野部 寛人（農学部生物生産科学科 4年）
小野間智秋（農学部資源生物科学科 4年）
松嶋 優李（農学部資源生物科学科 4年）
石井 暁（農学部地域環境科学科 4年）
中津 祐也（農学部地域環境科学科 4年）
曲山 康平（農学部地域環境科学科 4年）
増田 裕典（農学部地域環境科学科 4年）

プロジェクトの概要

現在、農業に関わる人たちの数は減少しており、食や農業に関する知識、関心の低下が危ぶまれています。それは国内トップクラスの農業産地である茨城県でも例外ではありません。私たちは農業との関わりが薄い方たちに食や農業について正しく知ってもらおうと共に、地域をより活発に盛り上げることを目的としています。

主な活動としては耕作放棄地を利用した耕作・食農教育イベントの企画、農業・農村を応援する大学生サークルネットワークへの参加、NPO法人グラウンドワーク笠間さんとの協同活動、牛久沼周辺の耕作放棄地の開拓、学園祭への出店などがあります。

活動日は基本毎週土曜日で、このほかに農作業の関係や食農教育イベントの開催、外部連携との活動のために、不定期に活動が追加されます。

プロジェクトの成果報告

- ・耕作放棄地を利用した耕作、イベントの企画

現在、2つの圃場を持っており、どちらも耕作放棄地だった場所でした。今年度はそばや夏野菜、小松菜、サツマイモ、落花生、スナップエンドウ、バジルなどを栽培しました。

また、私たちは自分たちの圃場を利用して小学生とその保護者を対象に食農教育活動を行いました。夏にピザ窯を製作し、小学生たち夏野菜の収穫からピザの調理体験をしてもらいつつ、そばの種まきも体験してもらいました。秋にはサツマイモ収穫・焼き芋づくりを体験してもらいながら、成長したそばを収穫してもらい、千歯こきや唐箕などの道具を利用して脱穀してもらいました。

→農業をする女性のイメージアップにつながった。

日本で最も耕作放棄地の多い茨城県で農地を有効に活用できた。

本格的な食農教育により、児童やその保護者が「食」や「農」に対する正しい知識、理解を得ることができ、農業における担い手不足や「食」の分野における食生活の乱れなどの課題に良い影響を与えられた。

茨城特産の常陸秋蕎麦の知名度あげることができた。

- ・農業・農村を応援する大学生サークルネットワークへの参加

全国の大学の農業サークル17団体が参加しているネットワークで年に数回、各県で交流会を兼ねた農作業を行っています。夏に世界農業遺産である金沢の千枚田で稲刈りを、冬に沖縄県にあるサトウキビ畑でサトウキビ狩りなどを行いました。このように県内にはない伝統的な農業に触れることに加えて、志を同じくした全国の様々な仲間たちとの情報交換により、互いの長所を取り入れながら、

今後の活動への士気を上げることもつながりました。

- ・NPO法人グラウンドワーク笠間さんとの協同活動

笠間のまちおこしを目的としたグラウンドワーク笠間さんの活動にご一緒させていただき活動しています。農業の6次産業化のための研究、作物育成、町のお祭りのお手伝いなどをおこないました。

- ・牛久沼周辺の耕作放棄地の開拓

千葉大学の援農お宝発掘隊さんと協働しているプロジェクトで、今年度からスタートしました。今年度は牛久の耕作放棄地を水田に戻し、実際に稲を育てることに成功しました。この水田の今後の有効な利用方法を現在模索中です。

- ・学園祭への出店

圃場で育てた作物を販売しました。また、来場者へのアンケート活動も同時に行うことでその年の食農教育への関心やどのようなニーズがあるかを調査しました。

- ・今後の課題・展望

今年度の食農教育活動では阿見町内で最大の阿見町中央公民館をお借りして、定員まで参加者を募ることができました。よって、今年度の規模が阿見町での食農教育活動の限界となったことが課題となるので、来年度以降は、イベントの2日間日程での開催や行政などとのさらなる連携、協力を試みます。

平成28年度優秀プロジェクトの選出

平成29年2月20日(月)に、平成28年度学生地域参画プロジェクト実施報告会が開催され、各プロジェクトチームが活動の内容や成果を発表しました(写真)。

その後の審査員による審議の結果、平成28年度は、以下のプロジェクトが優秀プロジェクトに選出されました。

最優秀プロジェクト



まなびの輪 ～大洗との協働～

審査員からのコメント (一部抜粋)

「活動を長く継続しながら、新しい内容も取り入れ工夫されていると思いました。」
「目的、行うべきことが明確でした。」
「次年度以降の継続に向けた参加学生のメンバー構成を工夫するとともに、活動の幅を広げており、評価できました。」
「実りの大きな活動でした。しかも、いかにも大学生らしい「子供、親世代」との距離感がよかったです。」

優秀プロジェクト



茨大聞き書き隊 Notes



あみゆめカフェ
～知って、好きになって、発信する 未来に繋げるカフェづくり～

審査員からのコメント (一部抜粋)

「よく準備され、計画的に進められていました。防災教育への貢献も評価できました。得られた成果のPRも充実させてほしいと思います。」「難しいプロジェクトをよく実行されたと思います。今後の継続についても期待しています。」

審査員からのコメント (一部抜粋)

「活動の中に、メンバーのみなさんらしいセンスやこだわり、工夫を感じました。」
「手づくり感が伝わってきました。背伸びをしていない感じがよかったです。阿見町のポテンシャルを引き出してくれることを期待しています。」

平成28年度「学生地域参画プロジェクト」募集要項

1. 目的

茨城大学社会連携センターでは、茨城大学の学生が地域社会と連携し、学生らしい斬新で多彩な発想により、地域の抱える課題の解決に向けた取り組みや、地域の活性化に寄与する活動を積極的にすすめられるように「学生地域参画プロジェクト」を設け、これを支援しています。

2. 支援対象者

本学の学生とします。

3. 連携先

特に定めない。本学の教職員と連携し、学生が主体で行う事業も申請可能とします。

4. 募集プロジェクト

(1) 対象となるプロジェクトの分野

地域社会と連携した、次の分野のものであることを条件とします。

1. 教育・研究プロジェクト
2. ボランティアプロジェクト
3. 課外活動プロジェクト
4. 地域交流プロジェクト
5. 国際交流プロジェクト

(2) 実施期間

原則として単年度での採択となり、継続を希望する企画においても毎年度申請書を提出していただきます。

また、複数年にわたって継続的に活動する希望がある場合には、3年間を目途に計画してください。

(3) 支援金額

年間最大50万円を上限とします。(審査により減額して配分する事があります)

5. 申請方法

(1) 申請資格

本学の学生（大学院生・留学生を含む）であることを条件とします。また、個人、グループを問わず申請が可能です。

ただし、プロジェクトの申請および実施には、アドバイスやサポートを行う顧問教員が必要となります。顧問教員が見つからない場合には社会連携センター事務局までご相談ください。

顧問教員および連携先の担当者と連絡を密にし、企画内容を十分に打ち合わせてください。

プロジェクトに参加する学生は、事業申請までに傷害保険および賠償責任保険に必ず加入してください。未加入者がいることが判明した場合は、採択を取り消す場合があります。

※下記内容での申請および購入等はできません

- ・サークル活動のための物品購入等を目的とした申請
- ・卒業論文、卒業研究、授業、ゼミナール等で取り組む内容での申請
- ・書籍や、税込価格が5万円以上の物品の購入
- ・打ち合わせに伴う飲食物の購入

(2) 申請方法

所定の「申請書」に記入の上、参加者全員の傷害保険および賠償責任保険に加入していることが分かる書類を添付し、以下の提出期間内に提出してください。

【申請書提出期間】

5月23日(月)～6月3日(金) 9:00～16:00

【提出先】

水戸地区：社会連携センター1階 社会連携課地域連携係

日立地区：工学部学務第二係

阿見地区：農学部学務係

【申請書様式入手先】

<http://www.scc.ibaraki.ac.jp/department/kyousei/students>

なお、申請に関する情報を社会連携センターのホームページ上に掲載しますので、必ずご確認ください。

6. 申請プロジェクトの審査方法

(1) 評価のポイント

審査は4つの観点から行います。

I. プロジェクト内容と支援経費の主旨との整合性	II. 計画の独創性・魅力
III. 計画の実行可能性	IV. 得られる成果・効果等

(2) 審査の進め方

申請書を審査員が確認し、審査員から質疑があった場合には、申請代表者へメールで照会しますので、回答期限内に質疑について回答してください。

上記回答をいただいてもなお質疑がある場合には、個別にヒアリングを行うことがありますのであらかじめご承知ください。

7. 採否の発表等

採否については、平成28年6月下旬頃に申請代表者全員にメールにて通知します。

また、社会連携センターのホームページ、学務部掲示板および各学部掲示板においても発表します。

8. 採択後の日程（予定）

プロジェクト実施期間：平成28年7月1日(金)～平成29年1月31日(火)

(1) プロジェクト実施に関する情報提供・・・平成28年6月下旬（採択通知後）

申請書を審査採択通知後に採択プロジェクトを対象として、プロジェクト実施に関する情報提供を行います。

(2) プロジェクト実施中間報告等・・・平成28年10月中旬～11月上旬

プロジェクトの進捗状況の確認や課題等について話し合う相談会を実施します。

(3) プロジェクト実施報告会・・・平成29年2月中旬

プロジェクトの実施内容をまとめた報告会を開催します。報告会終了後の審査において優秀プロジェクトを選定し、学長表彰の対象プロジェクトとして推薦します。

- (4) プロジェクト実施報告書の提出・・・平成29年2月下旬
プロジェクトの実施内容をまとめた報告書を提出していただきます。

9. その他

- (1) プロジェクトにかかるチラシ、パンフレット、冊子等を作成する際は、「茨城大学社会連携の助成に拠った」旨を明記するとともに、茨城大学ロゴマークと「社会連携センター支援事業」を付記してください。WebやSNSなどで発信する際も同様です。
- (2) 報告書等に添付された事業風景等の写真は、社会連携センターにおいて、ポスター、冊子等に使用する場合がありますので、あらかじめご了承ください。
- (3) 報告書は、茨城大学社会連携センターのホームページ (<http://www.scc.ibaraki.ac.jp/>) および茨城大学図書館ROSEリポジトリいばらき (<http://ir.lib.ibaraki.ac.jp/>) に掲載する場合がありますので、あらかじめご了承ください。

10. 注意事項

- (1) デジタルカメラ等については、原則として大学で貸し出しを行いますので、必要とする場合にはあらかじめ社会連携センターまでご連絡ください。
- (2) 購入した物品等はプロジェクト終了後に大学に返還していただくことがありますので、あらかじめご了承ください。

11. 問合せ先

茨城大学社会連携センター事務局（社会連携課地域連携係）

Tel: 029-228-8585

E-mail: gakupro@ml.ibaraki.ac.jp



まなびの輪 ～大洗との協働～

優秀プロジェクト 活動風景



あみゆめカフェ

～知って、好きになって、発信する 未来に繋げるカフェづくり～



茨大聞き書き隊 Notes

茨城大学社会連携センター支援事業 平成28年度学生地域参画プロジェクト報告書

発行 国立大学法人茨城大学
〒310-8512 茨城県水戸市文京2丁目1番1号
編集 茨城大学社会連携センター
問い合わせ先 社会連携センター事務局
(社会連携課地域連携係)
TEL 029-228-8585 FAX 029-228-8495
E-mail gakupro@ml.ibaraki.ac.jp